
アニマクリエイト

交わらない世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニマクリエイト

【Nコード】

N1746Y

【作者名】

交わらない世界

【あらすじ】

ただ目的もなく、ただだらと研究や従者といちゃいちゃする物語。

ゲーム系は自キャラ憑依が多いような気がしたので書いてみた

1話

万物召喚の書、それが俺の探していたアイテムだ。

いきなりこんなことを言われても意味が分からないだろうから最初から説明する。

まず、俺はとあるゲーム、『アニマクリエイイト』というゲームにハマったのが原因だ。

このアニマクリエイイトというゲームは、自キャラのクリエイイトが自分で出来るのだが自由度がとにかく高い。

これは、心理学などでいわれるアニマ、分かりやすい例で言えば理想の女性像として現れる、と言われているそれを表現しようというのだから、かなりの自由度を誇っているわけだ。

そして俺は、自キャラを作るのに12時間かけて自キャラを作りを上げた。

作り上げた自キャラ——ユースティティアと名づけたのだが——を使い、レベルを上げ、時には仲間をクリエイイトして、攻略していった。

ゲーム内のレベル的には2000以上いけば全てのステータスがカンストする。一応最高レベルは9999だ。

これは、元々このゲームはお気に入りのキャラを作りそれで冒険するというゆるいゲームだからだ。

そのためコアなゲーマーはほとんどいない、そして俺は3年前、5年掛けてこのゲームで自キャラのレベルをカンストさせた。

そのときに出てきたのが万物召喚の書を手に入れろ、というクエストだ。

それから3年間探して手に入れたのが、万物召喚の書というわけだ。

「ふゝ、終わったな、でも、このアイテム何につかんだらう？
w i o i には情報がなかったしな」

そんなことを呟きながら画面を見る。
すると、画面が勝手に動き出し、万物召喚の書を使った。

「え？　なんで」

そこまで、いった時に画面から光があふれ俺の意識は途絶えた。

「……方が、……の、主様」

声が聞こえる、途切れ途切れではあるが心地よい声だ。
主様？　何のことだ？

「ふむ、我より、少し大きいぐらいかの？」

次は、鈴を様な声、なんとも変わった喋り方をする子だな。

「主様、力ない……？」

平坦な、それでも心配しているのが分かる声だ。
そろそろ目を開けよう、このままじゃあ、状況が分からない。

「んっ」

眩しい、どうやら日が差し込んでいるようだ。

「主様、おはようございます」

最初に聞こえた、心地よい声が聞こえてくる。

誰だ？ は？ いや、待て、ど、どういことだ、な、何で？

縁がレースになっている黒い目隠しをし、メイド服を着ているそして、流れるようなウェーブのかかった金の髪、手には手袋をつけているが甲の部分が開いている、それぞれの甲には、左手の甲には天秤の刺青、右手の甲には剣の刺青が描かれている。

身長は高い、確か175ぐらいに設定したはずだ……現実逃避は止めよう。

「これは、どういうことだ？」

「はい、ご説明させていただきます、主様」

「わかった、でも、その前に確認をいいか？」

確認をしておきたいことがある。

「はい、主様」

「聞くが、お前はユースティティアか？」

そうそれが問題だ、もしそうなら

いや、間違いないだろう、正義の女神をモデルに作った、俺の自キャラ。

「はい、間違いございません、主様」

どうやらこれはあれだな、異世界に飛ばされたというやつか……

「そうか、俺の名前は佐々木 明人だ、明人と呼んでくれ」

「はい、アキヒト様」

「それじゃあ、今の状況をなるべく分かりやすいように説明してくれ」

「はい、それでは、まずアキヒト様も気づいていらっしやるでしょうが、この世界はアキヒト様のいた世界ではありません」

最初っからぶっ飛ばしてくれるね。

「そっか、それじゃあ、ここは？ もしかして、『スピリットワールド』か？」

スピリットワールド、アニマクリエイトの世界の名前だ。

「いいえ、違います、この世界はアキヒト様のいた世界でもなく私共がいた世界でもない異世界です」

この世界に飛ばされた原因ですが、おそらくアキヒト様の世界と私共の世界があまりにも遠かったのが原因かと思われます」

「なぜ、遠かったことが原因なんだ？」

「はい、私が使った万物召喚の書を覚えているでしょうか？」

あれは、どんなものでも召喚すると言われている書です、私共はそれによって主様を召喚しようと思いました
ですがあまりに遠く、力が足りなかったので主様の世界から限界まで私共の世界に近い世界に召喚し、そこに私共を召喚したのでしよう」

つまり、移動距離が長かったから俺を移動できるところまで移動させて、俺を移動させたところにユースティティア達を移動させたってことか。

「俺は、帰れるのか？」

「難しいかと」

「マジかよ」

「別に帰らなくてもよろしいのではないのでしょうか？
アキヒト様は、私共の世界に來たいと常々言っていましたではありませんか」

確かに、あっちの世界よりは生きやすい……のか？

「そう……だな、あ、そうだ、名前、ティティーって呼んで言いか？」

ユースティティアって長いんだよ。

「はい、構いません、むしろアキヒト様に愛称を授かるなど望外な幸せです」

にこり、と微笑んでティティーが言う。
笑顔も似合う、もつと笑えばいいのに、さて、これからどうするか。

「それは良かった、それでこの世界はどんな感じだ？」

「はい、どうやら私共の世界に近いようです

ブンデイーの調査では北に10キロのところに王都があり、ギルドも迷宮もあるようです

いま私共がいるのは間に合わせですが、簡単なログハウスです」

ギルドや迷宮もある、生活には困らないかな、ティティーたちが
いれば遊んで暮らせるだろうし。

でも、まだまだ調べなきゃいけないこともあるだろう、例えば
ティティー達は自分達の世界では最強だったが、この世界では？

「ブンデイー、ちょっといいか？」

「デイーって呼んで、主様？」

小さな影が音もなく近づいてくる、さすが忍び、気配が希薄だ肌
は白く日に当たったことはあるのかというほどだ。

「あゝ、分かった、それで、デイーお金は使えそうだったか？」

気になるところではあるだろう、ティティーたちの世界に近いな
らティティーたちの世界の金が使ええる可能性は高い。

「遠目だったから、確実ではないけど、大丈夫だと思う」

「そうか、分かった、ありがとう」

頭をなでてやる、ディーは背が低い確か130だったかな。

「ぬう、主よ、ずるいではないか妾もなでて欲しいぞ」

そういつて出てきたのは、豪奢な鎧をまとった少女だ。

真っ白なきれいな髪、肌も白く、目が黄金色に輝いている、この子は聖騎士《パラディン》の。

「アリスティンか？」

「そうじゃ、それ以外の誰に見える？ それから妾は愛称では呼んでくれんのか？ 妾も主の作った、十二傑作の一人じゃぞ？」

十二傑作？ ああ、そういえば、俺が直接作ったのは十二人だけだからだな。

それ以外はネット上の気に入ったやつをアレンジとかして使わせてもらった。

「それじゃあ、アリス、アリスもなでてやろう」

そういつて、アリスをなでる、ここで違和感、なんだろう妙に自分の手が小さく感じる。

いや、まさか、いやいや、そんなわけ

「ティティー、か、鏡はあるか？」

今日は確認ばかりだなー、H A H A H A H A H A

「はい、こちらに」

ティティーに鏡を手渡される。

鏡に映るのは……男の俺、だが、若返っている？

多分15、6才の頃ぐらいだろうが、懐かしい限りだこの体になる前はギリギリ20代だったしな。

「アキヒト様、どうかなさいましたか？」

心配そうなティティーの声が聞こえてくる。

「いや、なんでもない、そういえば、フェリユハイトやアルファルスとか、他の十二傑作は？」

今いるのは、ティティー、デー、アリス、ただだ他の九人はどうなっている？

「他の九人は、この世界の探索に出てもらっています
幸いマッピング機能がありますので散らばらせて地図を作り上げています

今のところ報告としてはアルファルスが海を渡り大陸を見つけたと報告が上がっております
位置からしてもしかすると私共の世界と似たような形をしているかもしれません」

「地図か、あっても困らないけど、他のやつらはいつでも集められるのか？」

何が起こるかわからないからピンチになったらすぐ来れるようにしておいて欲しい。

「問題ありません、これがありますので」

そういつてティティーは万物召喚の書を見せる。

ああ、確かに世界も超えることが出来る本ならすぐに召喚できるだろう。

「そっか、それじゃあ、これからどうしよう？」

「アキヒト様の好きなように、私共はアキヒト様についていきます」

そういつて、優雅にお辞儀をする。

ネタ職業とはいえだったとはいえ流石メイド、職業なんて関係なくどうせカンストするなら何でも良かったんで選んだのだが、正解だったようだ。

「うーん、それじゃあ、まずは情報収集をしよう、ディー頼んでいいか？」

「任せて、情報収集、得意」

ディーは薄く笑う、かわいいぜ。

「それじゃあ、やって欲しいことをいつておく、まずは、この世界での冒険者のレベル、それから、ディーたちの世界のお金が使えるか、この二つを調べてきて欲しい」

この二つ特に後者が分かれば、それなりにどうとでもなるだろう。それが分かればこの世界の人間のレベルが高かろうが低かろうが密やかに生きることが出来るしな。

「分かった、いつてくる」

そういうと、ディーは部屋から消えた。

やっぱり見えないか、当然だな、そういえば俺にもレベルとかあるのだろうか？

まあ、今はいいか、ディーが情報を持って帰ってくるまでゆっくりしよう。

1話（後書き）

妄想がとまらない、もうひとつの方もこっちも最低でも1週間に一回は更新したいと思います。

2話

ディーが、情報を持って帰ってきた。

「報告、冒険者のレベル、低い、一番高くて200レベル、50レベルでも高いほう

お金は普通に使えた」

「迷宮の攻略のほうはどうなっていた？」

アニマクリエイトでは迷宮攻略は階層の倍以上のレベルが必要になる。

「向こうと同じだった、冒険者のレベルも、私達の世界と同じ、基準で考えていい」

ふむ、どうやら穏やかに過ごせそうだな。

「アキヒト様、大陸の個数が確定しました
数は9つ、私達の世界に近い形をしているようです
そしてモンスターについてですが、新種と亜種が確認されました」

「強さは？」

「たいした事ありません、1500以上あれば楽に勝てます」

1500以上ってそれは、たいした事ないとは言えないんじゃないのか？

でも、ティティーからしたらたいした事がない相手なのだろう。

「そつか、うゝん、それはもういいや、それで150レベルぐらいの子を王都に送って冒険者になってもらおうと思ってるんだけど、どう思う?」

150だつたらそこそまでいけるだろうし、それなりに儲けてもらつて家を建てようと思っているのだ。

「なぜでしょう?」

「俺達つてこの世界の人間じゃないだろ? だから、立場とかそこら辺を確立するには冒険者からなら楽だろ
家とか買うのも、高レベルの冒険者ならそれなりに融通してくれるだろうし」

「それでしたら、アリスティンなどのほうが宜しいのではないですか?」

「あゝ、いや、そんなの目立ちすぎるだろう、俺はしばらくゆつくりしたいし、実力が高すぎたら面倒ごとに巻き込まれそうだ」

魔法なんかもあるだろうし、それが使えるか実験とかしたいし

「分かりました、それではステイファンを召喚して王都に送ります」
ステイファン、えっと、確か騎士だつたかなレベルは150、オリジナルじゃないけどそれなりに俺が手を加えたやつだな。
そういえば、サポートキャラのレベルは課金でレベルの上限が決まるがこの世界でもレベルの上限とかあるのだろうか?

まあ、それを試す意味でもちょうどいいか、レベルが上がるなら

それはそれで楽しそうだし。

「うん、それじゃあ、それが終わったら俺が魔法を使えるか試してみたいから、その実験に付き合って」

「む、主よ、それは妾にさせてもらえぬか？」

そういうアリス、そしてそう発言をしたアリスに目を向けるというより睨むティティー。

「そう睨むな、ユースティティア、我だって、主に構って欲しいのだ」

あゝ、そっか、ティティーとばかり話しててアリスとはあまり話してないからな。

それを聞いたティティーも少し納得し、睨むのを止める。

「うゝん、それじゃあ、アリスに頼むよ」

「うむ、この妾がすっかりと主に魔法を教えよう」

魔法、魔法、楽しみだな。

そんなことを思いながらベットから降り、アリスに連れられて外に出る。

アリスに外に連れ出され家の近くの森の開けたところまで案内された。

「うむ、それでは、最初は魔力を目覚めさせるぞ」

「魔力を目覚めさせる？」

「そうじゃ、主は魔力を感じれないじゃろ？」

魔力を感じるには長年の精神修行か魔力を持つものによってその魔力を目覚めさせてもらうしかないのじゃ」

「ふむふむ、魔力を目覚めさせるのはどうするんだ？」

「こうやるのじゃ」

そういつて、アリスは俺の手を握る。

なんか暖かい物が流れてくる、むむ、これが魔力ってやつか？

「わかるかの、今魔力を送っておるのだが」

「分かるぞ」

「それじゃあ、今、流している魔力と同じような感覚がないか体の中を探るのじゃ」

体の中を探る、うーん……お、これかな、へそより下、いわゆる丹田というやつだろう。

そこにあるのが分かる、自覚した瞬間、体の中をめぐる様に動き始めた。

「どうやら見つけたようじゃな」

「ああ、でもなんか頼りない感じだな」

力を感じるのだが、あまりにも小さいように感じる。

「うむ、それも仕方なかつ、主はまだ目覚めたばかりなのじゃない」

「そつか、魔力を上げるならレベル上げしないといけないのかな？」

もしそつなら、モンスターと戦うことになるのか。
戦えるだろうか？

「そつじゃな、それについては後にするぞ、今は魔法じゃ」

アリスはちらりとティティーのほうを見てそつ言った。

「それもそつだな、魔力が目覚めたらすぐに魔法は使えるのか？」

「問題ないと思うぞ、初心者ならまずはランプの魔法からがよいかの、それじゃあ見ておれ、主」

ランプ

そつアリスが呪文を唱えるとアリスの右斜め上に光の玉が出来る。
ランプは洞窟などで光源を確保するのに使われる初級魔法だ。

「魔法はイメージからなる、そのため実際に魔法を見て発動すると
発動させやすいのじゃ

主もやってみるとよい」

「それじゃあ」

ランプ

俺の右上に光の玉が出来る、が、弱弱しく光るだけだ。
なんだか物悲しくなっていく、そしてだんだん小さくなっていき、
消えた。

「なんか疲れた」

体の中から魔力を持つていかれるってこんな感じなのか。
脱力感が半端じゃない、もう動きたくないって感じた。

「うゝむ、主は魔力がそんなに高くないようじゃな」

「……ル……だ」

「ん？ 主、何か言ったか？」

「レベル上げるぞー！！！！」

魔法は使えるには使えた、でもこんなんじゃ詰まらん、もっとま
しに使えるようになるようにレベル上げをせねば。

「む、レベル上げか？ それはあやつが許してくれるのかのう？」

そういった、アリスが目を向けるのは、ニコニコと微笑んでいる
ティティー、そのティティーが近づいてくる、そして俺を抱きしめ
る。

「アキヒト様、そのような危険なことをする必要はありません、ど

うか自身をご自愛くださいませ」

「いや、でもな、男としてはこういうことに興味があるというか、知的好奇心が沸くというか」

この世界に来る前は年齢〃彼女いない暦だったのでこんな美女に抱きしめられて、その匂いとかやわらかさにあたふたしてしまう。

「知的好奇心ですか、それでしたら、魔術などはどうでしょう？魔法はどちらかといえば理論に沿って使うものではないですから」

「魔術？」

アニマクリエイトには魔法はあったが魔術はなかったはずだ。

「はい、これは、アルファルスからの報告ですが、魔術は私共の世界にはなかった理論でありますがこの世界の理になつた力の行使が可能との報告がありました」

ふむ、つまり、魔法は理論に沿って使うものではないが魔術は理論に沿って使うものなのか、確かにそれは面白そうだが、だが

「結局、レベル上げは必要なんじゃないか？」

魔術を使うにしても魔力は必要だろう。

「大丈夫です、魔術はパスと呼ばれるもので従者などから魔力を吸い上げることが出来るそうです」

ですので、私とパスをつないでくださればいくらでも魔術の行使が可能になります」

「おお！！　すごいな、それじゃあ、そのパスをつないでくれ」

「分かりました、それでは」

ティティーがそういうと、地面には二重の円が描かれその中に凄まじい速度で何ともいえない文字がびつしりと描かれていく。

そして、二重になっている円の外円と内円が逆に回り始めると、体の中に何かが入ってくるのが分かった。

それが俺の体の中――丹田らへん――にある魔力にくつつく、体の中にティティーの魔力が流れ込んでくる。

「あゝ、ティティーもうちょつと魔力を弱めてくれないか？
なんといか、こう……体が熱くなる」

魔力供給というのは結構気持ちいいものかもしれない、こう、体に力があふれる。

でも、これは危険な力であろう、少し気持ちがふわふわして力に酔いしれそうになる。

暴力とは無縁の平和な世界で育ってきたからか、一瞬でも力任せに全てを叩き潰して蹂躪したいと思った自分に嫌悪感を持つ。

「申し訳ございません、大丈夫ですか？」

ティティーは俺から少しはなれそう聞いてくる。

「うん、大丈夫、そろそろ暗くなってきたし、少し家に戻ろう」

「はい、分かりました」

そうして俺は家に戻った。

「はあ、魔力供給は便利だけどあんまり吸い上げすぎると、テンションが上がって大変なことになりそうだな」

家に戻り、自分の部屋のベットに腰かけて独り言を呟く。

コン コン コン コン

「開いてるぞ」

「失礼します」

入ってきたのはティティーだった。

「どうかしたのか？」

「はい、アキヒト様、魔力供給の事です、魔力供給時に気分が高ぶることを嫌悪していたようなので、気分を高ぶらせないで魔力供給できる方法があるのですが」

「気づいていたのか、それで、どんな方法だ？」

魔術の実験をするたびにあんなテンションにならなくていいなら大抵のことは受け入れよう

「はい、それは……」

「それは」

ゴクッ

「私と契りを結ぶことです、そうすればパスがかなり安定しますの
で魔力の微調整が出来ますので」

へえー、ティティーと契り？ を結ぶことかー、契りつてあれだ
よね、あれ、確か約束とか誓いつて意味だよね。

「えーっと、それは約束とか誓いのほうの契りか？」

取りあえず聞いておく、意思の疎通は大切だからな！！

「いいえ、男女の交わりのほうです」

そっか、ティティー何でそんな怖い目してるの？
獲物を狙う、動物のようだよティティーその迫力は怖すぎる。

「ティティー落ち着こう、ほら深呼吸」

「申し訳ございません、アキヒト様、罰は受けます」

そういつて、ティティーは俺の肩を押してベッドに押し倒す。
手や足をバタバタとさせて暴れるがティティーはぜんぜん動じな
い、これがステータスの差というやつだろうか？

「かわいらしいです、そのように暴れて、でも、大丈夫です
気持ちよくさせてあげます、ですのであまり暴れないでください」

そういつて、俺の手をつかみ、片手で俺の両手首を束ねる。
ティティの顔が近づいてくる、甘いにおいがする、魔力を少量
ずつ流し込まれ、頭がくらくらする。

「大丈夫です、全てお任せください」

「う……ん？」

目が覚めた、昨日何か凄い夢を見たような気がする。

「アキヒト様、昨日は誠に申し訳ございませんでした
いかなる罰でも受けるしだいでございます」

いきなり、ティティが謝り始めた。

「ど、どうしたのティティ？」

「昨夜のことを覚えてないのですか？」

昨夜、昨夜、そ、そういえば、押し倒されて……えっと、それか
ら、それから？

「えっと、よく思い出せない、凄く気持ちよかったとは思いつける
んだけど」

「ああ！！ 申し訳ございません、アキヒト様、罰を、罰をお与え
ください！！」

ど、どうしよう、かなり自分を追い詰めているようだ。

「ティティー膝立ちをして」

「はい」

ティティーはすばやく膝立ちになる。

顔は下に向けている、ティティーに近づき、ほほに手を添えてこちらを向かせる。

目隠しによつて、目はあわせれない、顔を近づけ少し唇に当てる程度のキスをする。

「ティティー別に俺は人形が欲しいわけじゃない、命令で動く人形じゃなく常に自分で考え動ける人間になれ」

最初は、ゲームのキャラで何でも出来ると思っていた。

でもちゃんと、感情とかどうしようもない気持ちとかがあって、それは俺と変わらなくて人間らしい気持ちだ、自分の感情を殺して人形になるのはつらいと思う。

だから、人間としてその気持ちに沿った行動をして欲しい。

「今回の契りについては、パスによる魔力供給時の感情の高ぶりがほとんどなくなっているのが分かるから、罰はなしだ」

「はい、アキヒト様、ありがとうございます、私は常に自分で考えアキヒト様を喜ばせるようより一層努力します」

頭を下げお礼、そしてそのまま宣言をするティティー、いや、俺のためだけじゃなくて自分のためにも努力してね。

俺は、そう言おうと思ったが、満面の笑顔を浮かべるティティー

には言いづらかった。

3話

ティティーとの話が終わり食事に向かった。

食事が終わった後でアリスに昨日のことを問い詰められた。

主の部屋で異常な魔力の奔流が起こったが、なんだったのかと。

「いや、まあ、色々あったんだよ」

誤魔化すことにした。

「こつちを見て言うのじゃ、主よ」

目が泳いでいたのがばれたらしい、ティティー助けて！！

そう、ティティーにアイコンタクトを送る。

「アリスティン、昨日のアキヒト様の部屋での魔力の奔流は私とアキヒト様が契ったことによって起こっただけです」

あれ？ 言っちゃうの？ それ言っちゃうの？

「な、なんじゃと！！ どういうことじゃ、主！！」

アリスは俺の肩を持って、前後に揺らす。

やめて、揺らさないで戻ってくるから、食べたものが口から出ちゃう。

「お、おちついて、昨日のはパスを安定させるためにやっただけで」

俺がそういうと、アリスは俺を揺らすのをやめて、ティティーを

睨み始めた。

「我はそんなこと聞いてないぞ、ユースティティア！」

「それは、言つてませんから」

二人の間に険悪な雰囲気が漂う。

「えーっと、二人とも落ち着いて、喧嘩はよくないよ？」

「む、むむ、じゃが主、ユースティティアとだけ契りを結ぶのは妾だけじゃなく他のものも納得しないと思うのぞ？」

「そついうものなのか？」

よく分からんぞ

「そついうものじゃ、ブンディーよ、お主もそつじゃろ？」

「私も、主様と交わりたい」

急に現れたディーが無表情でそついう、いや、かすかに白いほほが赤く染まっている。

「まあ、この通りじゃ、そこで提案するのじゃ、まず序列順に主が契つていけば全て解決すると思うのじゃ」

「序列？」

「十二傑作を強い順に並べた順番じゃ、それに序列順に呼び出すこ

とによって主が全員と顔合わせが出来るのじゃ、この案はとていいと思うのじゃ？」

確かに顔合わせにいいかもしれないけど、その、やるんだよね？
いや、男としては気持ち良いしいいのだが。

「あゝ、そういう話はまたにしよう、俺は折角パスが安定したんだから魔術をやりたいのだが」

「む、分かった、しかし、魔術は誰が教えるのじゃ？ 妾としては魔法を教える代わりに妾が教えたいところじゃ」

「うん、俺はそれでも構わないけど、アリスは魔術使えるの？」

向こうにはなかったから、使えないかと思っただけだ。

「ユースティティアからある程度は聞いておるし、分からなければ、アルファルスに聞けばよい」

アルファルスは魔法使いだ、確か海を渡って大陸を見つけたって言うてたっけ。

「アルファルスは今どこにいるんだ？」

「報告では、他大陸のアカトリエルと呼ばれる王国で魔術について調べているとの事です」

やっぱり魔法使いだからそういう事に興味があるのかな？ アカトリエル？ って所は魔術が調べられるって事はそれなりに魔術に進んだ国なのか？

「アカトリエル？　は魔術が進んでるの？」

「はい、何でもアカトリエルは昔から魔術の研究が盛んでその力をもつてして大陸を支配したほどですから」

おお！　それは凄い。

「でも、危なくなかったのか？　大陸を支配するほどの力を持つてるんだろ？」

「そうでもなかったようです、最高レベルで500程度のエルフの王が出てきたぐらいですね」

「えるふ？　エルフがいるのか？　だったら、アルファルスが王国で魔術を学べるのは分かるな

それにしても、エルフの王族か、会ってみたいな」

スピリットワールドは人間以外にも種族がいてティティーとティーは人間だが、アリスは真祖の吸血鬼だ。

そして、アルファルスはハイエルフだ、ハイエルフはエルフの王族というくらいなのだからその姿だけで受け入れられるだろう。

「はい、ですが、王国は受け入れたのではなく、受け入れさせられた、というのが正しいでしょう」

「どづいつこと？」

「はい、どうやらアルファルスはアキヒト様が魔術に興味を示したことでそれについて調べるために魔術王国であるアカトリエルで情

報を収集しようとしたのですが最初は顔を隠していたので追い払われたそうです

その仕返しに、王都の隣に王都と同じサイズのクレーターを魔法でつくり、魔術書を見せなければ国を滅ぼすと脅したそうです」

何やってんの、あの子は、めっちゃくちゃすぎるよ！！

「何でそんなことしたんだろう？ 顔見せれば普通に入れただろ？」

「何でも、まだアキヒト様にも顔を見せていないのにそこらの有象無象に顔は見せれないと」

他のやつは！！ 他のやつらはどうしてる？ まさか！！

「まさかと思うけど、他の八人は大丈夫だよな？」

「他の八人も顔を出していませんがそれほど無茶はしていないと思います」

思います、なのか、もしかして無茶やってるかもしれないってことか？

俺はものすごく不安だよ、もう考えないようにしよう。

「そうか、無茶してないと、良いなあ…… うん、それじゃあ、アリス魔術の指導お願い」

俺は、すこし遠くを見つめ、すぐに気を取り直して、アリスに言う。

「うむ、分かった、それでは外に出るぞ」

アリスに慈愛のこもった目で見られた、嬉しかったけどなんだか泣きたくなった。

昨日魔法の練習をした場所に来た。

「それでは妾も完璧ではないが妾の知りえたことを解説しながら実際に使って主に教えていくのじゃ」

解説ばかりじゃあつまらないし、実際に使って見せてくれるってのはいいな。

「では、まずは魔術の種類について説明していくのじゃ」

「魔術には種類があるのか？」

「うむ、といっても2種類じゃ、よく使われるのは詠唱魔術じゃな、呼んで字のごとく詠唱によって魔術を発動させる方法じゃ

そして、次にルーン魔術じゃ、こっちは力ある文字により魔術を発動させるのじゃ」

ふむふむ、どっちもそれっぽいな。

「質問なんだが、俺がやるのはよく使われる詠唱魔術の方か？」

「いや、ルーン魔術の方じゃ、そもそも詠唱魔術はルーン魔術の力ある文字を声に出して呼んで使う、そのため研究をするなら詠唱魔術よりルーン魔術の方がいいのじゃ

ちなみに詠唱魔術のメリットはルーン魔術より圧倒的に簡単に発動させられることじゃ、元が戦争のために作られた魔術じゃしの

まあ、実際にどちらとも使って見せよう」

光よ我らが光よ我に道を示したまえ

するとアリスの右上に光の玉が出来る、ランプの魔法と似ている。そして次はアリスの左上に魔力で円が描かれそれに文字が刻まれていく、そしてそこに光の玉が出来る。

「まあ、こんな感じじゃ、詠唱魔術は複雑な魔術になればなるほど詠唱が長くなるという欠点があるのじゃ

ルーン魔術は正確な魔力操作をして円を描きその中に文字をかくことが出来なければ発動しない、これがルーン魔術の欠点じゃ、研究用に使うにはまったく問題ないがの

まずは、正確な魔力操作が行えないとどうにもならん、というわけです。主よこのように魔力で円が描けるようにするのじゃ」

そういつてアリスは目の前に魔力で円を描く、俺もまねをして魔力で円を描いてみるが、うまくいかない。

「主よ魔力は自分の手足と変わらぬ、魔力はイメージによって簡単に動かすことが出来るのじゃ

魔力操作は慣れれば呼吸をするのと変わらないほど簡単に出来るようになる、感覚で描けないのであれば、道具をイメージすればよい、そうすればイメージに補正がかかる」

イメージか、円を描くならコンパスだろ、コンパスを思い浮かべる、そしてそれを使って円を描く。

少し歪だがさっきよりましな円が描けた。

「うむ、イメージがうまくいったようじゃな、慣れれば道具を思い浮かべなくてもかけるようになるじゃろう
しばらくは、この円を描く練習じゃな」

基礎は大切だしな、がんばるしかないか。

そして、延々と丸を描き続け低たらいつの間にか日がだいぶ傾いていた。

円の方はコンパスを思い浮かべてゆつくりなら10回中10回とも成功した。

早く描こうとすると10回中5回は失敗する、コンパスを思い浮かべなければ成功したのは10回中1回だけだった。

「主よ、だいぶ成功するようになったの、しばらくは研究にしか使わんのじゃろ？」

今日は日も傾いてきたし主も疲れとるじゃろ、家に帰らぬか？」

「ああ、そうだな、今日は疲れたしそろそろ帰るか」

結構、集中力を使ったから精神的にも疲れてきたし、家に帰ったら早く寝たいくらいだ。

「それでは、アキヒト様、帰りましょう」

ティティーが俺の手をとって引いてくれる、眠くてすこし舟をこいでいる。

そんな感じで、帰路につくのであった。

3 話（後書き）

誤字脱字の報告、感想などいただけたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746y/>

アニマクリエイト

2011年11月9日17時02分発行